



Title	Impact of ADHD Coexistence on Internet Addiction Symptoms in Children with ASD: Effects of Family- and School-Related Factors and Sex Differences
Author(s)	河邊, 宏幸
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105560
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 （ 河 邊 宏 幸 ）	
論文題名	Impact of ADHD Coexistence on Internet Addiction Symptoms in Children with ASD: Effects of Family- and School-Related Factors and Sex Differences (ADHDの併存がASD児童のインターネット依存症状に及ぼす影響：家庭・学校関連因子と性差の影響)
論文内容の要旨 自閉スペクトラム症（ASD）児における、注意欠陥多動症（ADHD）の併存とインターネット依存（IA）症状関連に関する研究は不足している。本研究では、ASD+ADHD併存がIA症状に及ぼす影響を、家庭・学校関連因子と性差を考慮して分析した。児童精神科病棟入院中のASD児（n=71）とASD+ADHD児（n=93）を対象にIA症状を評価した。重回帰分析の結果、対象集団全体ではASD群とASD+ADHD群でIA症状に有意差はみられず、登校状況の低さがIA症状の高さに関連した。性別によるサブグループ解析では、ASD群女兒はASD+ADHD群よりIA症状が高値であった。また女兒では、薬物療法といじめ被害が、それぞれIA症状の低さと高さに関連した。男児では、登校状況の低さ、社会経済的地位（SES）の低さがIA症状の高さと関連した。ASD+ADHD併存は必ずしもIA症状の重症度を高めるわけではないことから、併存はASDとADHDの単純な組み合わせではない可能性があり、その病因や表現型、性差、治療の選択等について解明が必要である。ASD+ADHDの併存がIA症状に与える影響についても、性差や家庭・学校関連要因を考慮した追加の研究が必要である。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 （河 邊 宏 幸 ）			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	片山泰一
	副 査	教授	吉村優子
	副 査	准教授	水野賀史

論文審査の結果の要旨

本論文は、自閉スペクトラム症（ASD）児において注意欠如・多動症（ADHD）の併存がインターネット依存（Internet Addiction：IA）症状の重症度に与える影響を、家庭および学校関連要因、さらに性差の観点から踏まえて検討した後ろ向き観察研究である。児童思春期精神科病院に入院したASD児164名を対象に、ASD単独群とASD+ADHD併存群を比較し、IA症状をInternet Addiction Test（IAT）により評価した点に本研究の方法論的特徴がある。

その結果、ASD+ADHD併存がIA症状を必ずしも増悪させないことを、比較的規模の大きい臨床サンプルにおいて実証的に示した。さらに、全体解析では差が認められない一方で、性別による層別解析により、女子ではASD単独群の方がASD+ADHD群よりもIA症状が重いという、従来の仮説とは逆の結果を明らかにした点は独創的である。これは、ASDとADHDの併存を単なる症状の加算として捉える従来の見方に再考を迫る知見であり、ASD+ADHDを独自の臨床プロファイルとして捉える必要性を示唆している。

また、IA症状に関連する要因が性別によって異なることを示し、男子では学校出席率や社会経済的要因、女子では服薬状況やいじめ被害といった心理社会的要因が重要であることを明確にした点は、臨床実践への応用可能性が高い。診断名のみでは捉えきれない個別性を重視し、性差や生活環境を踏まえた支援の重要性を示した点で、本研究は小児精神医学および発達臨床領域において意義深い貢献をなすものである。

以上より、本論文は十分な学術的独創性と臨床的価値を有しており、博士（小児発達学）の学位に値すると判断する。